

# 藤島宗順『詠草留』（安永六年分） 解題と翻刻

大 山 加 大 藤  
谷 中 藤 山 大  
俊 延 弓 和 静  
太 之 枝 哉 香

## 〔解題〕

本稿は、京都女子大学蘆庵文庫に所蔵される、新日吉社宮司、藤島宗順（宝暦六年一七五六〜文政四年一八二一、六十六歳）の和歌詠草類のうち、安永六年（一七七七）分を収める『詠草留』（宗順自筆写本、一冊、詠草の①と呼ぶ）の翻刻・紹介である。本書の書誌事項は以下の通り。

〔整理書名〕『藤島宗順詠草留』。〔整理番号〕四―四三。〔目録通番〕一四〇。写本。横本、折紙列帖綴、仮綴、一冊。共紙表紙。外題、「詠草留」（左肩・打付書・墨書・藤島宗順自筆）。内題、なし。寸法、縦一六・六糎、横二二・七糎。丁数、全三八丁、墨付三六丁。遊紙、後に二丁。料紙、楮紙。紙背に記述あり。（整理書名・番号は『蘆庵文庫目録と資料』（日本書誌学大系九八、青裳堂書店、二〇〇九年刊）所収「蘆庵文庫蔵書目録」に拠る）

藤島宗順は明和三年（一七六六）十一歳にして出仕、非藏人に補せられ、安永二年（一七七三）には石見守を受領する（『藤島家伝』）。安永六年は二十二歳、この年、二月十七日に小沢蘆庵に入門した。

本書は、小沢蘆庵の合点・添削を受け始めた安永六年の詠草を宗順自身でまとめたもので、合計、百四十一題、各題二首宛、計二百八十二首が記載されている。合点・添削者は蘆庵であると考えられるが、本書は合点・添削部分も含め全て宗順の筆と見え、蘆庵に呈した詠草から転写されたものであろう。

蘆庵文庫には、同じく安永六年の詠草を書き留めた自筆詠草が他に四種伝わる。

- ②〔藤島宗順詠草〕（四―四八）写本。半紙本。一冊。袋綴、仮綴。共紙表紙。外題・内題、なし。表紙右下に「藤島石見」の署名あり。第一丁表右上に「安永六年」と小字朱筆で記す。寸法、縦二二・四糎、横一六・六糎。丁数、墨付一六丁。遊紙なし。半丁に一題、各二首、計六四首を記す。合点・添削あり。本文は宗順筆。料紙、楮紙。
- ③〔藤島宗順詠草〕（四―八〇）写本。半紙本。一冊。袋綴、仮綴。共紙表紙。外題・内題、なし。表紙右下に「藤島石見」の署名あり。第二丁表右上に「安永六年」と小字朱筆で記す。寸法、縦二二・二糎、横一六・三糎。丁数、墨付九丁。遊紙なし。半丁に一題、各二首、計三六首を記す。合点・添削あり。本文は宗順筆。料紙、楮紙。
- ④〔藤島宗順詠草〕（四―四二）写本。半紙本。一冊。袋綴、仮綴。共紙表紙。外題「詠草」（左肩・打付書・墨書）。内題、なし。表紙右下に「□島石見」の署名あり。第二丁表右上に「安永六年」と小字朱筆で記し、歌題「初冬」の右肩に「稽古百首「」」と小字で墨書する。寸法、縦二二・一糎、横一六・九糎。丁数、墨付三三丁。遊紙なし。半丁に一題、各二首、計六六首を記す。合点・添削あり。本文は宗順筆。一八丁表右上に「安永七年」と小字朱筆で記すので、一七丁裏までが安永六年の詠草。本書の一〇三〇丁の下部喉寄り部分は大きく破損する。料紙、楮紙。
- ⑤〔藤島宗順詠草〕（四―三四）写本。横本。一冊。折紙列帖綴、仮綴。共紙表紙。外題、「安永六年九月（從廿三日

／十月十二日〕詠草案<sup>百首</sup>（左肩・打付書・墨書）。内題、なし。表紙右下に「藤原宗順」の署名あり。第一丁表右上に「安永六年」と小字朱筆で記す。寸法、縦二二・四糎、横一六・六糎。丁数、墨付二六丁。遊紙なし。半丁に二題、各二～五首を記す。推敲あり。いずれも宗順筆。同年九月二十二日に卒した叔父の藤森大藏大輔の服喪期間に詠じた稽古百首の詠草案。最終丁は、羽倉信美・橋本経亮から宗順に送られた服喪見舞の和歌を載せる。料紙、楮紙。紙背に記述あり。

右のうち、②と③所収の和歌、計百首は全て本書（四―四三）にも収載される。④については三題四首のみ本書所収和歌と重なり、⑤とは三十四首が重なる。（本書との重なりについては、以下の翻刻の各和歌の末尾に②～④の記号を付して示した）また、①および⑤の紙背の中には、本書の表面の詠草と重なる和歌も見られる（同じく該当和歌の末尾に①・⑤と付す）。紙背の詠草には合点・添削が施されておらず、蘆庵に見せる前の段階の詠草が反古として利用されたと思しい。

本書には、冒頭の「寄松祝」題に付された書き入れに「二月十七日小澤氏入門。／十九日持参即点」とある以外、年月日についての記述は見られないが、安永六年との記述のある②～⑤と重なる和歌があることで、安永六年中の詠をまとめたものであると言えることになる。⑤の紙背の中には、本書35・36番歌の詠草が見られ、歌題「古溪花」の右肩には「三月八日兼題」と記されている。また、同じく55・56番歌の歌題「聞郭公」の右肩には「同当座」とある。おそらくは、非蔵人達による歌会のための詠草を蘆庵に示しその指導を受けた詠草を、およそ時間順にまとめたものが本書なのではないかと推測する。宗順初学期の蘆庵による指導の実態が知られる資料として留意される。

なお、②～④はいずれも半紙本仮綴一冊の写本で、表紙右下に「藤島石見」の署名を持ち、半丁に一題二首が記されるという、ほぼ同じ形態の詠草である。本文筆跡は宗順自筆と思われるが、合点・添削部分は墨の色も異なるものが多

く、宗順とは別筆と見られる。和歌本文の異同からは②・③の本文が本書に先行すると考えられる例が多い。②・③の合点・添削部分はあるいは小沢蘆庵自身の筆跡かとも思われるが、当時通常、師の合点・添削を受ける際は折紙詠草の形式を取るものとすれば、蘆庵・宗順以外の第三者の筆跡の可能性も考慮されねばならない。但、内容については蘆庵によるものと考えて問題はない。

〔凡例〕

- 一、翻字は原則として原本通りとする。但、以下の項目については改めたところがある。
- 一、旧字体・異体字・合字は原則として通行の字体に改めた。
- 一、適宜、句読点・並列点を施し清濁を分かった。
- 一、訂正の前後で清濁が異なる場合は、清音表記のままとした。(例：51番歌第二・三句「いづくはあれと此宿の」)
- 一、丁の表・裏の移り目は「ㄣ」を付し「ㄣ」などと示した。
- 一、割書部分は「〜」で括り示し、改行箇所は「／」で示した。
- 一、見せ消ち部分は網掛けで示した。また、墨減・重ね書き部分は抹消線で示した。
- 一、虫損・抹消等による判読不能箇所は、字数が判る場合は□で、判らない場合は「」で示した。
- 一、単純な誤字訂正と認められる箇所は、改めた後の形で翻字した場合がある。
- 一、評の書入は《》で括り示し、該当語句と考えられる箇所の左に傍線を付した。
- 一、歌題のまとまりを表したと思われる記号は、「『・「」」で示した。
- 一、その他、私の注記事項は（ ）で示した。

一、上記①～⑤の宗順詠草資料に所載の和歌については、和歌の末尾に①などと注記した。

〔翻刻〕

「詠草留」〔外題〕

寄松祝（二月十七日小澤氏入門。／十九日持参即点）

1 一、ことしよりといく千とせとおなじ年ゆへ 一、さかふらんとはいはず。さかゆらん也と  
はるごとに みどりぞ  
ことしよりなを色そへていく千とせかげさかへゆく庭の松がえ、① 《よく調候》

2 四のとき葉がへぬまつのかみどりいやとしくに色やそふらん、① 《こも調候》

梅香薫袖

3 手折なば猶いかならんゆきずりの袖さへふかく匂ふ梅が、 《よく調候》

4 かほる香を袖にうつして梅花ちりなん後の形見とやせん 《是も》 1才

帰雁連雲

5 ながめやる遠の雲路にほのかなる声をのこして帰るかりがね

6 声はしてすがたはそれと白雲の八重たつ峯を帰る雁がね 《二ノ句おとり候》

思不言恋

7 言の葉に出なばよそにもれなんといはで物おもふ我身とをしれ 《人ニシレト云也。不言ニイカシ》

8 いはでたゝおもふ心のくるしさを神ならずして誰かしるべき 1ウ

『 翫花

9 もてはやす心をしらは春風も花のあたりはよきてふかなん② 《調候》  
 10 おもふどち春の情をくみかはし花の木陰にけふもくらしつ②

## 山家嵐

11 ひとり住柴の庵戸ほそのの明暮に友となれきく軒の松かぜ②

《如此友馴問、三ツニわたり候詞ヲ一句ニつかへば、此句ばかりみじかくなる也》

12 くる人もまれなる柴の庵には松のあらしを友とこそきけ②「2才

## 寄獣恋

13 人よしれいく夜なみだをかたしきてひとりふすぬの床のつらさを②

14 なれもわがおなじおもひか小男鹿のつれなき妻を恋わぶる声②

## 霞添山色

15 なれてこぞにみしゆきものこらで此ころはのどかにかすむ春の山のは③、①

16 此比はゆきげの雲も立かへてかすみにはほふ遠の山のは③、①「2ウ

## 鶯出谷

17 住なれし谷の古巢を出て今朝みぎりの竹にきぬる鶯③、①

18 いとはやも谷の戸いで、此朝け竹の葉山にきなく鶯③、①

## 沢若菜

19 消がてのゆきふみ分てしづのめが沢辺にもゆる若なをぞつむ③、⑤

20 もへ出し山えの沢④は「出由の」の初わかないざおり立て我もつま、し③、⑤「3才

夕花

21 へかへるべき家路わすれてくる、木のもとにまであかずぞめづる花の下かげへ③、①

22 くるゝとも猶みはやさん明日はゆきとふりなばおしき花のさかりは③、①

郭公

23 ほとゝぎすをのがさ月と此ころは声もおしまずをちかへりなく③、①

24 ほのかなるたゝ一声を鳴すて、いづちゆくらん山時鳥③、①」3ウ

新秋露

25 秋きぬといふよりやがて庭の面の草の葉ごとにむすぶ白露③、⑤

26 いとはやも秋をしらせて此朝け萩の上葉にむすぶ白露③、⑤

七夕契 《七夕トカキテ、ナヌカノヨトヨム。タナバタトヨムコトナシ。カナニテカクベシ》

27 七夕のちぎりはたへえじ天の河としに一夜のあふせなれども⑤

28 いつよりか契りそめけんとし毎の秋にかはらぬほし合の空⑤」4オ

野外鹿

29 露しげき秋の野はらの草分てゆきかへりなく小男鹿の声⑤

30 秋の野に妻やこもると小男鹿の真萩分つゝゆきかへりなく⑤

祝言

31 へおしなべてめぐみあまねきわが君が代のさかへをあふぐ四方の国民③、①

32 諸人もおなじ心にわが君が御代のさかへをあふぐかしこさ③、①」4ウ

## 経日恋

- 33 日へてもつれなき人の心とはしらで恋せし身をぞうらむる  
 34 恋しきは猶こそやまねわが中につらき日数はかぞへそへても

## 古溪花

- 35 みよや人年ふる谷の花ざくらちまくおしきあたらアマリ盛りを  
 36 手折べき人しなれば年へても深谷がくれの花はやつれず⑤ 《よく調候》 5才

## 夜燈

- 37 ひとりのみぬる夜の床の淋しさに友とか、げてむかふともし火②  
 38 淋しくもひとりぬる夜の手すさびにか、げてむかふともし火のかけ②

## 暮秋虫

- 39 花にみし野べの百草霜がれてむしの音よはる秋の暮がた② 《よく調候》  
 40 霜むすぶ草のまがきのきりぐす秋も暮ぬと声よはりゆく② 《是も》 5ウ

## 時雨雲

- 41 村しぐれはる、とみれば時の間にまた（さか）そひくる風のうき雲② 《よく調候》  
 42 むらしぐれふるもはる、も吹おくる風のまに、さそふうき雲②

## 卯花

- 43 雪の色月のかけともまがふなり卯花さける庭のまがきは②  
 44 卯花のさけるまがきはふりつもるゆきかとはかりあやまたれける② 6才



葵

45 けふといへばためしかはらずかけわたすこすの葵の色ぞ涼しき 《よく調候》  
46 けふごとの此神わざに宮人のかざすあふひの色ぞ涼しき④

夏月

47 ふけゆけどねやへもいらすはしるして涼しくむかふ夏のよの月  
48 はしるして涼しくむかふ程もなくあくるぞおしき夏夜月 《二首ともよく調候》 6ウ

炭竈

49 吹かぜにけぶりのすゑも打なびきよそめ淋しき小野、炭がま②  
50 山人もけふはなやきそすみがまの道もなきまで雪のふれ、ば②

庭前花

51 五色も香もいづくはあれと此宿のみぎりの花ぞわきてえならぬ③  
五色も香もいづくはあれと此宿のみぎりの花ぞわきてえならぬ  
にまはらじ

52 あかすなをちりなん花のおしければいたくなふきそ庭の春風③ 7オ

夕鐘

53 高根にはのこる夕日のかげながらふもとはくる、入相のかね③  
54 吹おくる風にたぐへてきこゆ也声かすかなる入相のかね③

聞郭公

55 き、そめてなをこそしたへほと、ぎすほのかにもらす今の一こ糸③、⑤

56 とひこずはきかましものをほとゝぎすしのび音もらす深山べの里③⑤「7ウ

松下泉

57 立よりてむすぶ袂は夏ぞなきまつの木かげの山井の水③⑤

58 生しげる松の木かげにせきいれて涼しくむかふ庭のまし水③⑤

雪朝望

59 すゑ遠くみるもはるけし野べ山辺けさふりうづむ雪の白妙③⑤ 《如此とめたる、よはくてあし、》《花の白たへ、同》

60 野をひろみわけゆく方もしらくきにうづみはてたるけさの朝あけ③⑤「8オ

寄道祝

61 誰もみなおなじ心にあふぐらんやまと言葉の道のさかえを③⑤

62 つきずなをよゝにさかえん敷島の道すなほなる大和言のは③⑤

初逢恋

63 したひてしうさもつらさもわすられてうれしくかはすうひの手まくら①

64 うれしくもかはし初ぬる手まくらになをゆく末をたのむ言のは①「8ウ

旅泊

65 おもひいづるわが故郷の夢もみずあらいそ浪のよるのとまりは 《尤よろしく候》

66 かゝるうきたぐひも波のとまり舟都にかへる夢もむすばず

春雨

67 つれぐと日をふるまゝに遠近の山の木めもはる雨のそら②

68 空はなをふるとも空にはみえぬ春雨をみどり色そふ草木にぞしる② 《尤可然候》 9才

籬山吹

69 しめゆひしまがきにさける山吹の枝もたは、にむすぶ白露②

70 露むすぶ庭のまがきに咲みちて枝おもげなる山吹のはな② 《二首ともよく調候》

『 更衣

71 今朝ははや花のなごりも夏衣うすきたもとに風ぞまたる、② 《尤可然候》

72 夏されば花の袂をぬぎかえてよそめ涼しき蝉の羽衣② 9ウ

秋夕

73 さらでだに淋しき秋のゆふ間暮あはれをそふるむしの声く② 《よく調候》

74 入相のかねのひゞきもむしの音もあはれぞふかき秋の夕暮②

惜歳暮

75 是る秋をたゞいたづらのみおにをくりきていまさらをしむ年の暮別かた② 《よろしく候》

76 いまさらををしむもはかな年の内にのこりすくなき日数かぞへて② 10才

『 水辺蛙

77 山吹のちりうく水にところえてかはづりなくなる井手の玉河③

78 たねおろす春の水田のみがくれにすだくかはづの声しきる也③ 《二首ともよく調也》

名所雪

尋余花

79 〳(一)わかなのはうらや (二)あしの辺はにしろく (五)降ふ雪れるは (三)よせるかへる波の (四)色かにまがみへれる (三)〳  
 《かへるは用なし。ふるをよせてかへらぬ〳波の色にまがふといへば》

80 よせかへる波の色にもまがふかな雪をしきつの浜のまさご地 (三) 10ウ

草花露

81 〳置露に千種の花のひもときてにしきをしさらす野べの通路 (三) 〳

82 ちらばおし吹秋風も心せよ千種の花にむすぶ白露 (三) 〳

新樹

83 〳梅桜かへでかしは木此比はひとつ若葉にしげりあひぬる (三) 〳《よく調候》

84 立ならぶ木々の梢も此比は若ばにしげる色ぞ涼しき (三) 〳《是も》 11オ

待郭公

85 きかばやと待夜はなをも時鳥などあやにくにしのお初音ぞ (三) 〳

86 〳待侘る我にはきかせ ほとゝぎすまだ世にしのお初音なりとも (三) 〳《セトバカリニテハ詞たらず候》

〳 柳帯露

87 風ふかばあちらりなん (五) 露のをしけらばつらぬきとめよ (三) 〳青柳のいとに (二) 〳

《此内にをしき心はあるべし》(二)には《よはし》との評も記されている

88 春風はよしやふくともちらさじといともてぬける青柳の露 (二) 11ウ

変恋

89 〳淵は瀬とかはるならひのあすか川しらでわたりし身をぞうらむる (二) 〳

90 神かけてちかいし中もいまさらにかくはかなくもかはるつれなさ②

苔

91 柴人もかよはぬ谷の木陰にはこけのみどりの色ぞそひゆく②

92 ま柴とるしづもかよはぬ谷かげは岩ねまつがね苔ぞみだる、②」12才

谷鶯

93 雪もまだきえあへぬ谷のふるすにもはるきにけりと鶯ぞなく⑤

94 はるきぬと誰か告げん谷ふかみふるすながらに鶯のなく⑤ 《二首とも調候》

款冬

95 なるをざりにみてやは過ん山がつかきねたは、に咲る山ぶき

96 春風も吹なみだしそ山ぶきの花にはへある露の白玉」12ウ

初雁

97 ゆふ間暮きりたちこむる峯こえてみやこの空に渡る初雁 《可然候》

98 はる霞わけてかへりし雁がねの月にとわたる声もめづらし 《調候》

九月尽 《のこれと下知して／ヤト言心得ず。かたみとみんといふべし》

99 ゆく秋のかたみとや、みん明日ぞなをきえなでのこれ草の上の露

100 うき時といひし物から暮ゆけばさすがにおしき秋の別路

五十  
— 13才

浅雪

101 《此句聞へず》  
降てしもつもりはやらず此朝けたゞ一えなる庭の白ゆき⑤

102 かれのこる庭の浅ぢの末葉さへうづみもやらぬ今朝のしらゆき

萩露

103 庭の面のまがきの内に咲いで、露に色そふ秋はぎの花②

104 置露に袖ぬるゝとも分みばや真萩さくなる宮城野ゝはら②  
《二首ともよく調候》 13ウ

春雨

105 打かすみふるともみえぬはる雨を軒端におつる雫にぞしる②  
《よく調候》

106 夕暮はいたくかすみの立こめてふるともみえぬはる雨の空②

芭菊

107 あかずなほ千とせの秋もみはやさん庭のまがきに咲る白ぎく②

108 朝な夕なめで、こそみれませの内にほひもふかき白ぎくの花② 14オ

時雨

109 山端はのこる夕日のかげみえてふもとの野べに時雨ふる也②

110 吹おくるあらしや雲をさそひけん又此里に時雨ふる也②

田家雪

111 守捨し賤がかり庵もみえぬまで田面につもる今朝のしらゆき②

112 まばらなる田づらのかり庵此朝けみえぬばかりにふれる白ゆき② 14ウ

原若菜

113 消がてのゆき間かき分てもとめて賤かき分ての女が山田のはらの若なをぞつむ 《よく調候》

114 渡会や山田のはらの雪わけてまだはつかなるわか菜をぞつむ 《是も調候》

叢螢

115 けちがたきおもひをみせてよなく／＼にほたるとびかふ野への草むら

《是も調候。但此句沢水とせば、叢もしたしく可被成候》

116 更行る夜は置露しげき草むらにすがるほたるのかげぞ涼しき 《尤可然候》 15才

江月

117 蚤小舟くまなき月にあくがれてみなと入江を漕やいづるらんなり 《此なり無下に力なし》

118 舟つなく入江をひろみ生しげるあし間あらはにてらす月かけ

《上二句下三句とヒトツニナリガタシ。江ノ中皆アシハラノヤウニ候》

田家

119 もる賤《此句いづれもひとつなるべし》が心やいかにふくる夜はさぞ露しげき小田のかり庵

120 ゆたかなる御代のしるしや朝な夕なけぶり立そふ民の家／＼ 15ウ

帰雁

121 咲花に心もとめず故郷なせやさでのかへるさいそぐはるの雁がね ②

122 朝霞八重た／＼ちこむる峯こゑこゑてこしぢにかへる春の雁がね ②

初冬時雨

123 冬きぬといひあへぬ間にいとはやも空かきくもり時雨ふる也②  
 124 けふよりは冬来にけりと降そむる時雨や四方に告渡るらん② 16才

## 寄民祝

125 万民おなじ心にあふぐらんかしこき君が御代のさかへを②  
 126 あら小田をあらすきかへす民すらもうるふは君がめぐみなるらん②

## 橋月

127 さやかなる月にめでつゝよるもなほ渡りとだえぬ淀の河はし 《よく調候》  
 128 よるもなほさやけき月にうかれつゝ旅人わたるせたの長はし 16ウ  
 《此句無念に候》

## 窓竹

129 すなほなるすがたをわれもまなばしとうへてぞむかふ窓の呉竹④⑤ 《不ノ字ニナル也》  
 130 うつし植てなほきすがたをならはしと朝夕むかふ窓の呉竹④⑤ 《是も》

## 山

131 はるは花秋は紅葉のいろくにながめぞかはる四方の山端 《尤可然候》  
 132 いつよりかつもりそめてしちりならんかげうごきなき山となりしは 17才  
 《いかゞ》

## 早苗

133 賤の女が門田の面におり立て植る早苗の色ぞ涼しき



134 いく千町おなじみどりの若なへはおしてわさ田のいろもわかれず

鵜川

135 更行ばくだすう舟の大井河いく瀬のなみをてらすかゞり火

《此句無用聞候》

136 あゆはしる河せの波のよるくにくだすう舟のかゞり火のかげ」17ウ

牆夕顔

137 よそめにはたが垣ねぞと夕顔の花もてかこふ山賤の庵

138 心なき賤がかきほに咲いでしあたら光りの露の夕がほ

夏草

139 かりはらふ人しなければをのづからしげるもふかき庭の夏草 《よく調候》

140 一節の道ものこらず此ごろはしげりあひぬる野べの夏草 《是も》」18オ

野夕立

141 山風の音もはげしく吹おちてすそ野にきおふ夕立の雨

142 かさやどりしばし立よる木陰さへ夏野にきおふ風の夕立

庭上月

143 庭もせの千種のうへに置露のひかりをみかく秋の夜の月

144 くる、よりひかりをそへて庭もせの草葉にやどる露の月かけ 《いづれも庭ならでもいふべし》」18ウ

卯月郭公

145 ほとゝぎすほのかになのる一声を卯花がきに聞はめづらし

146 卯花のさけるまがきにやどりしてをちかへりなけ山ほとゝぎす 《二首とも調候》

折不逢恋

147 \くりかへしいく年月かいのりても人はうき田の杜のしめ縄 《よく調候》

148 祈てもつれなき人の心ゆへいまはた神もうらみはてぬる」19才

鶉川

149 うかひ舟月の入江を漕いで、川せの波をてらすかゞり火

《川を言べきに江はいらぬ物也》

150 夕やみををのが時とや鶉飼舟川せの波にかゞりさすみゆ 《聞候。おもへる所なし》

山家煙

151 立のぼるけぶりにしるし深山にも庵をしめて人しすむとは 《テニハツマリ候》

152 み山にも庵をしめて住人のありとしらせて煙立にき 《以下よろしからず》19才

萩盛

153 此朝け枝もたはゝに咲みちてさかり色こき秋はぎの花

154 \しめゆひし庭のまがきの秋萩のけふこそ花の盛りなりける 《よく調候》

秋山

155 《さくらといふべし》  
咲花のながめもあれど秋といへばもみぢにあかずむかふ山のは

156 秋ふかくなりゆくまゝに遠近の山の木のはも色付のにけり」20オ

別

157 へりこん程をもいつとしらざれば辨こそをしめけふのわかれをいかにおしまん  
158 いかにせんまた逢ことはいつとしもしらぬわかれの今のつらさを

七夕月

159 今宵ぞと暮まちえつゝ天の川月にさほさす妻むかへ舟

160 ひこぼしのつまむかへ舟いそげとて追手にやふく月の小夜風 《いづれも月遠し》 20ウ

々々雲

161 へあまの川雲の衣を織女のこよひうらなくかさねてやぬるぬらん

162 織女の天の羽そでにうらなくも雲の衣をかさねてやぬる

々々橋

163 うちわたす天の川はしいかなれば二夜とかけぬ契りなるらん 《よろし》

164 天の川紅葉のはしをうちわたし二のほしのゆき合の空」21オ

々々草

165 へけふまちてひもとときそむる萩が花天つほし合の手向にやせん 《よく調候》

166 たなばたの手向にせよとかた枝まづひもとときそむる秋はぎの花

々々鳥

167 あかつきのゆふ告どりも心せよ二のほしのまれに逢夜は

168 たまさかのけふひこぼしの逢夜ともしらでや告る鳥の八声は」21ウ

々々枕

169 うれしくもこよひふたつのほしやぬる天の川原の波まくらして

170 つもりこし枕のちりやはらふらんまれに逢夜の天の川かぜ

々々祝

171 けふごとの逢せかはらずたなばたのちぎりや千とせ万代の秋

172 わくらばのあふせながらもたなばたのちぎりかはらぬあきやいく秋」22オ

籬瞿麦

《なでしこは本名也。とこは床によせていふべし》

173 さまぐの色をまじへて庭の面のまがきにさけるとこ夏の花

174 露ちりてなびくも涼しとこ夏のまがきをはらふ庭の朝風

樹陰納涼

175 立よればまだこぬ秋の涼しさも袖におほゆる杜の下かげ 《よく調候》

176 たちよりにて夕すゝみせん夏の日のあつさをよそにならの下かげ」22ウ

寄鏡恋

177 我ながらみるもはづかし恋にのみやつれしかげをうつす鏡は 《是も》

178 いたづらにかはるはうしやまつらなる鏡の神にかけし契りも

池水半氷

179 夜のほどの嵐やかに吹わけてなかばこほれる庭の池水

180 鴉どりのうかべるほどはとぢあげて池のみぎはほこほり初ぬる」23オ

梅風

181 吹おくる風のしるべの香をとめて梅さく里をたづねてぞゆく

182 吹たびにかほるもあかず咲梅のこずゑを過る庭のはる風

水鳥

183 池水のこほりのひまにをのがどちつばさならべてあそぶをしがも

184 ころほる夜のうきね侘てや池水のみぎはにさはぐをし鴨の声 《可然候》 23ウ

瀧紅葉

185 落瀧つきしねの紅葉染しより水にも秋の色をみせける

186 水上のあらしはげしくさそひけん紅葉ばちらす瀧つ岩波

早苗

187 乙女子は広き田面におり立てみどりの早苗とれどつきせぬ

188 天づたふ日も夕かけて賤の女が山田の面に早苗とる也」24オ

遇不逢恋

189 くれ竹の一夜ばかりの契りにてわすれはてつる我中ぞうき

190 逢みしはあだの大野、女郎花いつよりよそになびき初けん

三月尽

191 づめてもとまりもやらすけふのみと暮ゆく春をいかにをしまん

192 けふのみとおもへばいとおしきかなゆくゑもしらぬはるの別路」24ウ

## 鹿

193 小男鹿の妻こひかねてよひよりもあかつきかけて鳴があはれさ

194 小男鹿のつれなき妻をうらみてかながき夜すがら鳴あかす声

## 六月祓

195 けふといへばつみてふつみを御祓してあさの葉ながす賀茂の川水

196 つみとがを早瀬の波にはらひすて、心も清き賀茂の川水」25オ

## 山霞

197 鉤簾まきてむかふ外山にはるきぬとけさはかすみの立わたりぬる

198 へるきぬと今朝はかすみの立こめてのどかにむかふ遠の山端

## 百

## 尋花

199 分入てたづねぞわぶる山春さむみざくら花はまだしきみよし野、奥山

200 花みんとゆくゑもしらず白雲のかさなる山にけふもくらしつ」25ウ

## 霰

201 寒けしな音もはげしき山風にあられ玉まく野べのさ、原 《よく調候》

202 吹しきるあらしはげしく庭もせの浅ちが上にあられふる也

## 待恋

203 待侘る人はとひこでねやの内にふけゆくかねの声きくもうし 《よく調候》

204 待侘てねられぬまゝにながむれば月もかたぶく有明の空」26才  
《またばもとよりのぬべからず》

納涼

205 立よれば夏のあつさもわすられて涼秋かしさあかぬ杜たどるの下かけ  
206 しげりあふ杜の木かげに立よればたもと涼しき夕風ぞふく 《是も調候》

別恋

207 かならずといひなぐさめよ別てはまた逢事の定なくとも 《尤可然候》  
208 道芝の露もろ共に消もせでかへるはつらき今朝の別路」26ウ

述懐

209 しまさらにくやむもはかな書もみずたゞいたづら道しに月日過して  
210 よしあしをおもひもわけずいたづらをにきのふと過しけふとくらしつ

五月雨雲

211 日へへても空はひとつに雲とちてはれ間はみえぬ五月雨の比  
212 此ごろは晴間もみえず大空にいくえかさなる五月雨の雲」27才

松

213 年をくみにみどりをそへて此宿のさかえともなふ庭をの松がえ  
214 植置しみぎりの松のふかみどりかはらぬ色かけを友とこそみめ

萩

聞になほあはれもいとふかき夜に軒ばの萩の風の音信

216 215 夢さめて聞もいく度ねや近きのきばにそよく萩の上風」27ウ

## 野雪

218 217 笹のはのみ山はさぞな裾野さへふかくつもれる今朝のしらゆき 《よく調候》  
 かれのこる尾花が末もうづもれてひとつ色なる野への白雪  
 《尾花は白ければ、うづもれずともひとつ色也》

## 鶯

220 219 ときぬと谷の戸いで、軒端なる竹の葉山にうつる鶯④ 《よく調候》  
 いとはやもこち吹風のときぬと谷の戸いで、きなく鶯」28オ

## 歳暮

222 221 是る秋のわかれをうしとかこちしは数にもあらぬ年の暮がた 《よろし》  
 月花をいたづらにのみながめきていまさらおしむ年の暮がた

## 忍恋

224 223 みだれなば世にやもれなんもらさじと心ましにふかくしのぶ文字摺  
 心つめじちより袖そでにあまれるわが涙世にもらさじとつ思ふ、むくるしさ」28ウ

## 夜梅

225 ねやの戸のひまもとめつ、吹入てまくらにかほる風の梅が、 《よく調候》



226 ひとりぬる夜半の淋しき《ヲノ字不足》なぐさめてにほひをおくる梅の下風

『 萩

置露に枝もとを、に咲みちてさかり色こき庭の秋はぎ

228 227 一枝は折てかへらん萩が花秋の野守はよしとがむとも」29才

後朝恋

鳥がねに打おどろきて起わかれかへるはつらき衣ぐの空

230 229 まつよひのつらさもあれど暁のあかぬわかれのうさに過めや

『 旅

やどるべき家居なければ今宵又しらぬ此野に草枕せん

232 231 まれにみる都の夢のうれしさもつぐる人なき野べの仮臥」29ウ

百首之内 谷鶯

谷ふかみまだしらくきのふる巢にもはるをたどらでしらせて鶯ぞなく⑤

『よく調候』

234 233 春きても深谷がくれは白ゆきのふるすながらにうぐひすの鳴⑤

春曙

いつはあれどわきてたぐひも波の上あけほのかすむ住の江の春⑤

236 235 難波江やたぐひも波の末遠くかすみに、ほふはるの曙⑤」30才

岸柳

237 〳はる風にいとよりかけて行水の波のあやをる岸の青柳⑤ 《よろしく候》

238 波のあやを織そへけりなゆく水にみどりをあらふきしの青柳⑤

## 夏草

239 あげまきのかるともみえず野べは今道もなきまでしげる夏草⑤

240 〳若なつみわらび折つゝこし野べのおもかげもなくしげる夏くさ⑤」30ウ

## 早秋《草葉にてもおなじ事歟。さらば一葉の詮なし》

241 散そむる一葉の上に今朝よりは秋としらせて置くしら露

242 〳軒ちかき萩の上葉にけさよりはまづ吹そむる秋のはつ風⑤

## 山月

243 〳さはるべき雲はあらしに晴ていま山のはいづる月のくまなき⑤

244 吹かぜに雲きり晴てさしいづるかげもさやけき山端月⑤」31オ

## 暁霧

245 鳥がねの声より後もほのぐらくまだ夜をのこす秋ぎりの空⑤

246 〳暁の八声の鳥はなきてしもきりに夜ふかき山の下庵⑤

## 冬月

247 秋よりもひかりをそへて池水のこほりのひまにやどす月かげ⑤

248 〳立ならぶ木々の梢は落葉して霜夜の月の影ぞくまなき⑤」31ウ

## 野霰

249 吹すさぶ野べの嵐三に一小笹二原三吹しく四あられくだくる音のはげしさ五（訂正後は「嵐」を「山嵐」と読む）

250 あられふる音ぞはげしき朝毎に置霜こほる野べのさ、原五

寄露恋

251 待わぶるわかる、あしたわが袖はなみだの露のかはく間ぞなき五

252 もろくちる露のちぎりの言の葉をゆく末かけて何たのみけん五 32才

々風々

253 かならずとちぎり置いてしゆふ暮はまづ吹かぜもそれかとぞきく五

254 たのみこし人の心に秋風のいつよりなどで吹はじめけん五 《いつよりにて、よく調候。此詞あまれり》

々橋々

255 うしや世にながらの橋のながらへてつれなき人を恋わたる身は五

256 我中は久米路のはしのはかなくもかけし契りのたえぬるぞうき五 32ウ

々鳥々

257 たのみてし人もはこぬ夜のひとりねにわが身うづらの音をのみぞなく五

258 みるになほ我ひとりねをうらむぞよつがひはなれぬ池の鴛どり五

眺望

259 ちりうかぶさ、の一葉とみるがうちにゆくゑは波にきゆる釣舟五

260 舟つなぐみいなそと山よりかまけづ暮はそめて波ぢはるかにのこる日のかけ五 33才

## 述懐

261 くやみてもはかなかりけり年月をあだに過こし身のをこたりを⑤

262 年月をあだにくらしていまさらに身のをこたりをなげく愚さ⑤

## 神祇

263 さまざまに跡をたれつゝ君が代のさかえを守る八百万神⑤

264 あふげなほ此日本に跡たれて君が代まもる神の恵を⑤「33ウ

## 祝言

265 雨風もときをたがへぬめぐみにやなべてうるほふ四方の国民草⑤

266 わが君がめぐみにもれず民やすく世はゆたかなる時や此とき⑤

## 菖蒲

267 けふといへばためしかはらずだが宿ものき端涼しくあやめをぞふく②

268 朝日さす池のみぎはのあやめ草末葉の露のみえて涼しき②「34オ

## 春竹契久

269 葉がへせぬみぎりの竹の深みどり千とせの秋も友とこそみめ②

## 岡笹

270 万代も友とちぎらしはる毎にみどり色そふ庭の呉竹②

## 岡笹

271 旅人のゆきゝの岡は名のみにてしげるもふかき露の玉ぎゝ② 《心の理たちがたし》

272 〱ゆふ間暮岡のさ、原風ふけばつらぬきとめぬ露ぞこぼる、②「34ウ

菊契千秋

273 〱千々の秋三色もかもふりせず此宿の庭のまがきに咲る白五ぎくの花②  
(二)もちぎりてぞみん

274 〱句へなほ千とせの秋もみはやさん庭のまがきのしらぎくの花② 《こも調候》

旅宿夢

275 〱さ、なれぬ夜半の嵐のはげしさに旅のまくらは夢もむすばず②、⑤ 《よく調候》

276 〱海山のあかぬみるめをおもひねの旅のまくらは夢もなぐさむ②「35オ

落葉如雨 ②には題の右肩に「来廿四日兼題」とあり。また、題の下に「先達而一覽」と記す

277 〱いく度か夢おどろかすねやちかく風木々の木の雨と降よは②

278 〱小夜あらし吹にまかせてちる木のは窓うつ雨の音にまがへる②

百四十 初恋 ②には題の右肩に「同」とあり

279 〱ゆく末は猶いかならん分ぞめてけふよりまよふ恋の山口②道

280 〱きのふけふ恋ぞめしよりわが袖の涙の露をのかはくし聞ぞわづらふ②「35ウ

寄枕恋

281 〱敷妙のまくらもうきてながるらめひとりねつらき床の涙に②

282 〱ひとりぬる夜のつらさは敷妙のまくらの外たれにかしるべき②「36オ